
仮面ライダージェネラル

作者月詠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダージェネラル

【Nコード】

N6372L

【作者名】

作者月詠

【あらすじ】

風都第二高等学校に通うちょっと訳有りな高校生である俺、『鎧尉 阿木土』は知り合いの医者(?)からガイアメモリを譲り受ける。

俺は無事でいられんのか？

第一話【堅固なるG／変態(?) 医者と訳有り高校生】(前書き)

凝りもせずまた新しいのを書きましたね。
ゴメンナサイ。

第一話【堅固なるG／変態(?) 医者と訳有り高校生】

学校からの帰り道。

俺は【行き倒れ】腹へって虫の息(笑)を見つけた

？「いやあ、助かりました。まさか空腹で倒れてしまうとは…」

「おかげで財布の中身が空腹になったぞ、ヤブ医者」

俺は【鎧尉 阿木土】ヨロイ アギト。

風都第二高等学校3－A所属、出席番号35番。

んで、目の前にいるのが小さい頃に苦しくも世話になった医者…

【井坂 深紅朗】イサカ シンクロウ

いい年して一昔前の紳士の格好とは…さすが井坂、いやらしい

井坂「いやらしいとは…心外だなあ」

「モノローグを読むな、どうせ検査と言いながら女性のドーパントにお触りしてんだろ？ ああ、いやらしい」

ドーパントというのは【異形】、【超人】とも言える存在で、近くに寄ったから挨拶に言ったら女性のドーパントにお触りしてた訳で…

井坂「お触りとは…これまた心外だ。触診と言ってくれ」

「変態医者は皆そう言うんだ。墓穴掘ったな」

井坂「…そういうことには良く頭が回るんだね」

「そうでない俺は俺じゃない」

イジってなんぼのドS生活。
楽しい限りだ。

井坂「仕方ない…良い物をあげよう」

「金か?…なら50万よこせ。いままでのツケと迷惑料だ」

井坂「い、いや…お金ではないよ」

48万のツケはどうしてくれる…!

井坂「これだよ」

井坂が鞆から取り出したのは不気味な緑色で『G』と書かれたUS
Bメモリのようなものだった。

「…何コレ」

井坂「『ジェネラル』…將軍の記憶を孕んだガイアメモリだよ」

『ガイアメモリ』：確かそれぞれの地球の記憶が各種類に集まった異物だっけか？

井坂「君が16歳を越える頃に現れるよう遅延式の生体コネクタを付けたからね」

「やけにでかくて変な痣あるなって思ったらお前の仕業かよ」

ぶつくさ言いながら俺はガイアメモリを受け取る。
だが、そこで…ある仮説が生じた。

「ま、まさか…井坂お前…」

「…なんですか？」

井坂も何時に無くシリアスな表情になる。
やっぱり…

「ゲ…ゲイに目覚めたのか!!?」

あ、ずっこけた。

井坂「どうしてそういう考えに至るんですか!（汗）」

だってねえ…?

「俺をドーパントにして『うへへ…良い体してますねェ…いただきまーす♪』って感じで、アッー!…的な状況誘ってんだろ!？」

井坂「君の中の私のイメージってそんな感じなんですか!？」

「質問を質問で返すな!！」

この会話を聞きつけたお巡りさんが井坂を連行しようとしたが、井坂は事情を説明して回避しやがった。
…チツ!

井坂「まったく…危ない危ない…(汗)」

「よう、ご苦労!」

俺は最高ドSスマイルの笑顔で井坂を迎える。

井坂「君って子は…ハア。もうすぐ六時ですから帰りなさい」

「ん、そうするぜ」

井坂「何なら送りましょうか?」

「送り狼は勘弁だぜ？」

そうして俺と井坂は別れた。

次の日、病院から井坂の姿は無かった：

第一話【堅固なるG／変態(?) 医者と訳有り高校生】(後書き)

BL要素？

皆無ですよ、皆無

設定（前書き）

ちよいとネタバレあり。

読みたくない方は目次から先に行きましよう！

設定

ヨロイ
アギト
鎧尉 阿木土

17歳、男

本作から五年前に風都に引っ越してきた風都第二高等学校生徒。
引っ越して一年後に原因不明の病に陥り、井坂深紅朗の治療により
九死に一生を得る。

その際に遅延発症性の生体コネクタを胸中央に刻まれる。

さらに二年後に両親が謎の事故死を迎え、天涯孤独となり、暇潰し
に井坂をイジりに病院に向くことも。

性格はドが付くほどのサディスト。

『ジェネラル』のメモリの過剰適合者でもある。

ジェネラル (GENERAL)

ダークグリーン

『將軍』の記憶を孕んだガイアメモリ。

將軍の名に相応しい巨軀に強固な鎧。

速さこそ皆無に等しいが、頑丈さと力強さはガイアメモリ中で他の
追随を許さない程の力を秘めている。

攻撃方法は両刃大剣、鎖仕込みの大槍、鎖付き片刃斧チェーンアックス、肉弾戦。

武器三つは合体することも可能。

第二話【堅固なるG／強固なる將軍】（前書き）

三部構成になるかも…（汗

第二話【堅固なるG／強固なる將軍】

――翌日

再び学校の帰り道、変な覆面を被った男達に会った。

男A「残念だが、生け贄になってもらうぞ」

（。D。；）ハア？

どー見ても、マスカレイドドーパントです。
本当に（ry

男B「黙って生け贄になりな」

「だが断る！」

一昨日、井坂からもらったガイアメモリ…《ジェネラルGENERAL》を起
動する。

《GENERAL!》

そして胸中央の生体コネクタに挿し込む。

ダークグリーン風の風が舞い、俺の体に変化を起こす。

T字路のカーブミラーに映る俺の姿は：

2m半ばぐらいの巨軀に間接部を除いた数多くの分厚い装甲。

暗い緑に彩られた鉄仮面からは蛍光色の緑の二つの双眸が妖しく覗いていた。

(GBA版FEシリーズのジェネラルを思い浮かべてください)

男A「貴様：同志だったのか！」

『覆面と一緒にするな：ゴミ虫。高々、『仮面舞踏会』という娯楽の記憶に戦いの先陣を切る『將軍』に勝てると思っているのか？』

自らの体から染み出るこの覇気：そしてこの高揚する我が魂…！

だが視界、意識共に清々しいほど澄み切っている！

うむ：正に、最高にハイってヤツだッ！…だな。

まあ、我は吸血鬼ではないがな。

男B「くっ…！先生！先生ー！」

主^{スシ}らは何時の時代の人間だ？

？『人類皆弱く：遅い。どう思う？そこの鈍重そうな君？』

近くの木影から電車の様な姿をしたドーパントが現れる。

『『電車』か：フン。そんなに急いでいては、先走りすぎて足元を掬われるぞ？』

電車『ふふん・・ほざくが良いさ！さあ、轢き殺されてしまえ！』

電車の様な速いタックルをしてくるトレインドーパントだが…

ガン！

電車『グオワツ！！？』

私の装甲により、弾かれる。

電車『か、敵わない…！に、に逃げろー！』

弾かれただけで撤退とは…肝っ玉が小さい男だな。

メモリを抜いて、一息つくと井坂がやってきた。

井坂「スバラシイ！凄まじいな、ジェネラルの力は！…いや、この場合は阿木土くんのほうかな？」

「…るせーぞ井坂。こちら色々混乱してんだ…黙ってないとネットに有る事無い事流すぞ」

井坂「…っと、失敬。それは勘弁願いたいね」

おどけた様な行動を見せる井坂…様子がおかしい。

「何だ？今更『メモリ返せ』なんて言わねえよな？」

井坂「∴私の計画を知っていたんですね？」

「あ？んな事誰も聞いてねえよ、俺はただ∴『メモリを返すか返さないか』の話をただけだぜ？」

カマかけ
トラップは成功∴！

「聞かせてもらうぜ？その『計画』とやらをな！」

第二話【堅固なるG／強固なる將軍】（後書き）

阿木土の口調が変わるのはメモリの影響です。

第三話【堅固なるG／力の代償】（前書き）

とっても短いです。

（5／30 18..40 修正）

第三話【堅固なるG／力の代償】

——鎧尉家自宅《夜》

「…っ！…これが井坂の言っていた、ガイアメモリの毒素、か…！」

自宅に帰り自室に入った瞬間に体中を雷のような痛みが走った。

井坂から説明はされていたが、これ程とはな…！

——回想——

井坂『良いでしょう…君にはお話しますよ。』

私の…大いなる野望を！』

含み笑いをしながら説明しようとする井坂

阿木土『野望…だと？』

確かに、井坂は野心家のクセがある…それも、飛び切り狂っぶっとんている類だ。

井坂『ガイアメモリには特性と、それに見合った毒素があります。特に、君や私の様な過剰適合者ともなると…最悪《死》に至ります。私はその過剰適合者により、強力になったガイアメモリを私の体に

挿し込み、真の《超人》となる！』

野望の概要を話す井坂の顔は、いつもの苦笑いや、引き攣った様な笑いでなく…狂気に染まっていた。

井坂『ガイアメモリを進化させる方法は様々…私のように複数のガイアメモリの力を取り込む他…恐怖、憤怒、傲慢などの負の感情。そして逆もまた然り…というわけです』

説明し終わった井坂の顔は普段の井坂の顔に戻っていた。

阿木土『次は、特性と毒素についてだな。

ジェネラルメモリを持っている以上…メリット・デメリットは無視できないからな』

井坂『解りました。

特性とは、文字通り…各ガイアメモリの固有技能です。例えば、私の持つ《WEATH^{ウェザー}ER》のメモリの特性はそれぞれの天候に合わせた攻撃方法。

君の持つジェネラルのメモリは要塞の如き頑丈さと力強さです』

確かに、普通の力強さじゃ電車野郎の突進は防げなかったかもな。

井坂『毒素とは…まあ、言わずもがな…代償です。

その内容はガイアメモリが碎かれるか、メモリの過剰多用によって表れますが…それまでは症状は表れません。

一部の方は、その毒素を防ぐ…言わばフィルターの様な道具、《ガイアドライバー》を使っています』

阿木土『井坂は使っていないのか？』

井坂『一応持っています、メモリのパワーが下がってしまう為…
私には無用の長物ですよ』

―回想終了―

なるほど…強力すぎる力はその分、我が身を滅ぼす…か。

推測上だが、ジェネラルメモリの毒素…いや、副作用は『体内
組織、及び体内の破滅』

このまま使い続ければ、体は消滅するという事は確実だな…。
極力、使うのを止めよう。

しかし、それは悪神の所業か。
はたまた運命の悪戯か…。

俺はとんでもない事件に、半ば死人と成り得る体を投じることとな

る。

第三話【堅固なるG／力の代償】（後書き）

——次回の仮面ライダージェネラルは……——

「井坂…この阿呆が…っ！」

倒されるべくして、倒された男

「思い、くっ…返せば…、満更、でもなかったです、よ…君、この毎日、は…」

人生の最後に、最高の笑顔を残さんとする男

「井坂先生…」

数々の想いが交錯する中…

「アイツの野望は受け継げねえ…だがな」

破滅の道と解りながらも突き進む少年は

「アイツがくれた力と笑顔を糧に…」

その曇りながらも澄んだ瞳は、何を見るのか？

「俺は、この街を…」

嗚呼、悪質な試練に愚直に挑む少年

「守ってみせる！」

ここに在り

第四話

【さらばW／太陽の将】

第四話 【さらばW／太陽の将】（前書き）

約二ヶ月…おん待たせしましたアアアアア！

阿木土「前回の次回予告何！？俺こんなゲ r…もとい、臭い台詞言うのかよ！？」

後半は番外編にて言いまする。

阿木土「結局言うのかー！！！！」

後書きにアンケートを出しますので、出来ればお答え下さいね♪

阿木土「音符きめえ W W W」

るせー！

第四話 【さらばW／太陽の将】

とある日…気付けば俺は…

誘拐されていた。

…ってハア？（。D。）？

実行犯は運転席にいる【園崎^{ソノザキ}冴子^{サエコ}】さん。

井坂^{セクハラ}の触診現場にて触診^{セクハラ}を受けていた女社長さん。

「あの…なして俺冴子さんの車に？」

冴子「井坂先生のおかしいのよ…今生の別れみたいな顔をしていたの」

んなまさか…いや、もしや…

「冴子さん、井坂から何か受け取ってませんか？」

冴子「ええ、変にゴツゴツしたガイドライバーをね」
そう言って冴子さんがノールックパスで渡してきたのは、ジェネラルの肩の装甲の様な暗緑のパーツを両脇対称に二対、中心には一対

の齒車ギアの間に正方形のディスプレイの様な窓、全体的に金のラインが入った暗緑のガイアドライバーだった。

「この部分…まるで…ッ！」

『ジェネラルみたい』と言おうとした瞬間、脳内に戦慄が走る。

昔から直感には長けていたが…これは…！

「冴子さん！急いで下さい！！…すごく、嫌な予感がします…！」

俺がそう冴さんを急かすと冴さんは…

冴子「元よりそのつもりよ！しっかり掴まってなさい！」

そう言った冴さんは車をフルスロットル状態で飛ばした。

死ぬんじゃないぞ…井坂ヤブ医者…！！
着いた場所は崖のある岩場。

そこで井坂であるウェザードーパントと、青い細身の戦士が戦っていた。

井坂（ウエザード・バントWD）「は、疾い!？」

青い戦士は音速とも言えるスピードで井坂の攻撃を躲していく。

そして井坂の懷に飛び込むと同時に青い戦士は音速の蹴りを繰り出していく。

僅かな時間のはずなのに、たった四秒くらいのはずなのに、十分二十分と長く感じた。

そして…

《Trial! MAXIMUM DRIVE!!》

? 『9・8秒…それが貴様の絶望までのタイムだ』

青い戦士がそう告げると井坂に青いブレーキ痕の様な模様の『T』が表される。

そして…爆発。

井坂のメモリは排出され、碎ける。

それで戦いは終わったかの様に思えた。

だが…

プアアアアーン！

電車のクラクションの様な音が鳴り響く。

異変に気付いた俺は、井坂の後ろの林を見ると奥の方から木が薙ぎ倒されて行くのが見えた。

こんな線路の無い場所に電車…？

…ッ！

この前の電車トレインドーバント野郎か！！

「クソったれ！！」

冴子「阿木土くん！？」

俺は悪態をついて崖を駆け降りる。

後ろで冴子さんが何か言っているが構ってられない。

「ちょ、翔太郎くん！アレ！」
「あ？あ”あ”！オイ危ねえぞ！！」

外野も五月蠅い。
今はただ……

あの電車野郎を…

《GENERAL！！》

止める！！

暗い風が俺を変貌させていく。

素体となる体は巨軀となり、適合する様に細胞にも変化が起こる。

そして風も形を成して城壁の如く強硬な鎧と化する。

顔も中世の騎士の様な仮面兜となって双眸に光が灯る。

そして完成するは攻防を兼ね備えた將軍の記憶の顕現。

ジェネラルドーパントである。

『ぬうおおおおおおお!!』

最近判明したのは、ジェネラルは通常スピードは遅いが一回の瞬発力によって出るスピードは車…いや、ライフル以上に速かった。

つまりは…

あの電車野郎と同等以上の速さだ!

一気に突っ込んで来る我に身構える青い戦士。

だが目的は…

『邪魔だ!』

あの電車野郎だ!!

青い戦士を通り過ぎて地面に伏せる井坂の後ろに背を向けて立つ。

井坂「あ、阿木土君…!?!」

『なかなかの負けっぷりぞ、藪医者』

啞然とする井坂を背に仮面の下で笑う我。

プアアアアァン!

再び汽笛（？）が鳴る。

T D（覚醒体 『ヒヤッハアアア！死ネ死ネ死ネ死イイイネエエエ
トレインドーバント
！！！！！！』

普通車両に化した電車で野郎が喚きながら突っ込んで来る。

だが！

「ぬん!!!」

下半身に力を入れて衝撃に備え、電車野郎を受け止める。

TD (覚醒体 『ナアアアニイイ!!?』)

『五月蠅い阿呆は嫌いだ。ふんっ!!』

受け止めている両手に圧迫させる様に力を入れると車両の窓ガラス部分が全て割れる。

そして車両を持ち上げて林の方へ投げる。

『なんと言おうパワーだ…』

何かを呟く青い戦士。

外野は黙っておれ！

井坂「阿木土君、使いなさい…冴子君に貰ったであろう、あのガイアドライバーを！」

あのガイアドライバーか！

井坂「まず変身を解除し…

「ドーパント体から戻り…」

ガイアドライバー…いや、『ジェネラルドライバー』を腰に当て、

「ドライバーを腰につけ、ベルト状になる」

メモリを起動させて、ドライバーを展開し…

「ドライバー本体部分の両サイドのパーツが左右に開き、上部に差込み口が開く」

《GENERAL!》

開口部にメモリを差し込んで、両サイドのパーツを閉じ、ギアを最大まで外側に回しなさい！」

ジェネラルメモリを開口部に差込み、両サイドのパーツを閉じる。

そしてそのまま手を交差する様にギアを最大まで外側に回す。

《GENERAL!》

ガイアウィスパーの後を追う様に竜巻の様な音楽が鳴り響く。

ドーパント体と違うのは有機的な部分が無くなったのと、仮面兜がより近代的なこと、そしてアーマーカラーがダークグリーンからエメラルドグリーンに変わっていた。

「姿が、変わった?」

誰かが言ったかは知らないが、変わったのは…

『姿だけじゃねえ!』

その咆哮と共に右のギアを一段回内側に戻す。

《GENERAL BLADE!》

新たなガイアウィスパーが鳴り響くと、俺の前にエメラルドグリーンの竜巻が巻き起こり、その中から全長3.5m程の両刃大剣が現れる。

それを逆手に持って、再び向かって来る電車野郎に投げる。

大剣はそのまま電車野郎のポールを全て斬り捨てる。

TD（覚醒体『イ、イヒヤアアアアアアアアア!?!?』

オ、俺ノ部品ガアア!?!』

ポールを失った途端、電車野郎はスピードが出なくなった。

このまま叩っ斬っても良いんだが殺人は寝覚めが悪い。
どうすれば…？

井坂「ぐっ…！阿木土君！両サイドのパーツを開き、もう一度閉じるのです…それで『メモリブレイク』が可能となります」

まったく…ボロボロの体だつてのに…

『ありがとよ、井坂』

井坂「…ッ！」

よろよろとしている電車野郎を見据え、ドライバーの両サイドのパーツを左右に開き、もう一度閉じる。

《GENERAL! MAXIMUM DRIVE!!》

少し体制を低くし、右腕を上部で構えると肘から先がエメラルドグリーン風の風を纏う。

そして、踏み込む！

風を切る度に速度が増す。

反時計回りに自身の体を一回転させ、^{パワー}力に遠心力を掛け算する。

そしてその拳を…叩き込む!!

『《ジェネラルブレイカー！！》』

ドゴンッ！！

鈍い音と共に衝撃波が舞う。

すると電車野郎（覚醒体）の体はガラスの様に罅割れていき、遂には砕け散る。

砕け散った破片は日の光に反射して光の雪を創り出す。

「きれー…」

「こいつアすげーな…」

「幻想的な光景だね…それにあのメモリとドライバー…ゾクゾクするねえ」

「…見事だな」

「これはこれは…」

上から外野（女）、外野（男A）、外野（男B）、元青い戦士、井坂。

この幻想的な昼の雪に周りはただ綺麗というが、俺はガイアメモリが持っていた記憶が地球自身に帰ったのではないか…そう思う。

変身を解除して岩に凭れ掛かる井坂に近付く。

「元気…って訳じゃねえな」

井坂「ハハ…当然、でしょう…」。

君も…この原因は知って、いるでしょう？」

息絶え絶えながらも語る井坂。

「ああ。メモリの過剰適合による副作用と複数のメモリを取り込んだことによる過剰作用。」

井坂、もしやお前…それを知った上で…?」

井坂「フフ…ッ…どう、でしょうか?

もしかし、たら…違うかも知れませんよ…?」

そう話している間にも井坂の体は徐々に黒く侵蝕されていく…

「それは無いな。自分の死期を知った上で、俺に危険な目に合わせない様にコイツを俺に渡し、あくまで悪役を演じるつもりだった。」

『自分の友人さえも実験に巻き込んだ狂人』として…」

あくまで俺の推論だが…

井坂「…ッフフフ。流石ですね、阿木土君…貴方、探偵になってみては…ッ…如何ですか?」

「保留にしておくぜ…」

井坂「そう、ですか…ッ…!」

過去の大量『事故死』…感電死や焼死、溺死に凍死…明らかにウェザーの特性による殺人。

その頃の井坂に出会っていたら、俺はここにおらず、問答無用で実験体にされていただろう。

そして遂に、侵蝕は顔の半分を覆った。

井坂「そろそろ、の様です…」

「…ああ」

井坂「最後に…」

「…？」

井坂は今までに見たことが無い笑顔で…

井坂「思い、くっ…返せば…、満更、でもなかったです、よ…君、
との毎日、は…」

と言った。

俺は、己の中から溢れ出る感情を必死に抑える。

「…こっちもだ！この変態ヤブ医者！！」

無意識に声が震える。

抑えろよ…このバカに泣きつ面見せたら人生最大の恥じゃねえか…！

井坂「泣かずに笑いなさい。人を小馬鹿にした様な笑みが、君らしいのですから…」

「お前が、俺をおちよくる、なんて…五百年、早えん…だよっ！」

井坂「失礼…テルイ リュウ ヒダリ ショウタロウ照井竜、左翔太郎、フィリップ…彼を、阿木土君を、よろしく頼みますよ…」

井坂は俺の後ろに立つ三人へと最後の言葉を渡す。

「…わかった」

「…了解だ」

「引き受けよう…井坂深紅郎」

肯定する後ろの三人…

井坂「阿木土君…君との日常は暖かった。

騒がしくも、穏やかな陽だまりに居る様だった。

阿木土君、君は周囲を暖かく照らす太陽の様な存在だ…
私月はそろそろ、逆く落ちるとしよう…」

井坂が足元から消えていく…少しずつ…少しずつ。

井坂「今度は、私が奢りますよ…」

「そんな時はお前のツケ代の二倍だ…！」

井坂「はい、『また今度』」

そう言って、井坂は消えていった…。

井坂が被っていた帽子は、それを追うかの様に風に乗って空へと舞い上がる。

「井坂…この阿呆が…！」

快晴のはずの空からは、『雨』が降っていた…—N O s i d e
井坂深紅郎が死亡してから数日。

仮面ライダーの二人は銀行強盗のドーパントを追っていた。

W『オイ照井！もっとスピード出ねえのかよ！』

アクセルの頭部分をバシバシと叩くWこと翔太郎^{とライリッブ}。

アクセル『お前らを落とせばトライアルで追い付くがッ!？』

少し怒りに震えながら怒鳴るアクセルこと照井竜。

W『いや、落とすな!!』

アクセル（バイクフォーム）に乗ってドーパント二体を追うW。サイクロントリガー

相手は車と自動二輪であった。カードローバイクドーパント

CD『チイツ! あいつらしつけーな!!』カードローパント

ライトバンの様な姿に変わっているカードローパントはバックミラーなどを動かしながら悪態をつく。

BD『相手が飛び道具持ってたら終わりっすよ兄貴ー!』バイクドーパント

膠着状態で一定距離を保ちながら猛スピードで道路を疾走する四人（四体?）。

だが、そこへ…

CD『何だあのガキ…轢き殺したらア!』

BD『何か嫌な予感するー!（泣）』

二体のドーパントの前にGパン青ジャケットの青年が、腕を組み、仁王立ちしていた。

W《翔太郎！あれ！》

『あ？…はは、マジかよ…』

そして二人の仮面ライダーは数日前に現れた『将』に気付く。

アクセル『…遅いぞ。』

鎧尉阿木土『

ドーパントを待ち構える彼…鎧尉阿木土は口角を上げ、笑っていた。

阿木土「いくぜ…」

彼がそう言って取り出したのは数日前に使用した、正式名称『ガイアドライバーAO（AnatherZERO）』、俗称『ジェネラ

ルドライバー』を腰にマウントし、ベルト部分が現れる。

ドライバーの両サイドに付いているパーツ、『リミットボルト』を左右に開く。

そして懷からサイクロンメモリよりも緑が濃いエメラルドグリーン
のガイアメモリを取り出し、起動する。

《GENERAL!》

阿木土「変身…!」

そして、ガイアメモリをドライバーに差し込む。

リミットボルトを閉じ、ドライバー中央で横一列に並ぶ歯車…『ヘ
ルズギア・ヘヴンズギア』をリミットボルトを閉じた勢いでそのま
ま二つの歯車を外側に回す。

《GENERAL!》

ガイアウィスパーと共に竜巻を表す様な音楽が流れる。

それと同時にエメラルドグリーンの竜巻が阿木土を包み込む。

そして、『将』は現れる。

城壁の如き翠色の結晶鋼鉄の鎧

機械の如き冷血な黒鉄の西洋兜

ジェネラル『さあ、断罪の時間だぜ？』

それが、ジェネラルである。

第四話 【さらばW／太陽の将】（後書き）

PV、4198だぜー！（直前調査）

阿木土「意外にいったな：仮面ライダーは伊達じゃないって訳か」

さっそくアンケートだぜー！

阿木土「おー！」

阿木土くんを異世界に飛ばしたいと思います。
何処がいいですか？

1、魔法少女リリカルなのは（無印／st s）
体年齢退化、ジェネラルはデバイス化。

2、魔法先生ネギま！（修学旅行編から）
変更は無し。ただしチート（世界観的に）

3、Fate／stay night ほぼオリジナル
アーチャーの代わりに阿木土を投下。（世界観的に）やっぱりチート。

4、東方project
退化、性転換、恋愛フラグ有り。

5、無限のフロンティア

変更点はほぼ無し。ファントム初登場と共に阿木土も登場。

6、その他リクエスト
実現可能ならば外伝として書きます。

以上です。

阿木土「むげフロ以外にフラグを感じるんだが…」

何を言っているんだ？

阿木土「ひょ？」

俺のバトルフェイズはまだ終了してないZE☆

阿木土「ま、まさか！」

在るんだよ！フラグがよオオオオオオオ！！

ΩΩΩ＜な、なんだってエー！？

期限は作者が『もう良いよね…？ゴール（ry』な気分になったら
終了でござんす。

阿木土「できれば乳牛姫が良いです…いいじゃない…男の子だもの
…」

次回、仮面ライダージェネラル！

第五話 【日常のA／休日計画は確実に】

暗き闇を照らせ、ジェネラル！
お楽しみに！

阿木土「男の子だもの…あ、男の娘じゃないよ？ 思春期真っ只中の男の子だもの…」

第五話 【日常のA／休日計画は確実に】（前書き）

スランプの穴に落ちてました…

阿木土「そのまま堕ちてりや良かったのに…」

しゃらっぷ！

そんじゃいくぜ！

阿&a m p;作「「仮面ライダージェネラル、さっさと始まるぜ！」

第五話 【日常のA／休日計画は確実に】

あれから、まあ色々有った。

イナゴだかバツだかのゴスロリ女がミュージアムの元研究員をおっさんを表立ってストーカーしたり、拳句の果てにゃ若菜さんはモロ女王様キャラになったり、冴子さんが盗んだ(らしい)霧彦さんのナスカメモリを使ってレベル3の赤ナスカになってるし…

そして今…

『なあ所長さんよオ…どおして俺が協力せなアカンのさ?』

亜樹子「さっきも電話で話したでしょ? 透くんの映画作りに協力してって!♪」

事の発端は所長の後ろに座っている青年、『川相透』^{カワアイ トオル}。

遺伝子の配列を組み替える能力を持つ『GENE』^{ジーン}メモリの保有者だ。

こいつが『虹村あい』^{ニジムラ アイ}つつー映画館スタッフの同僚の姿になって『聖戦士ジェシカ』って長ったらしい未完映画を映画館のスクリーンを無断使用して放映した所を虹村あい本人が翔太郎達に依頼。

んで、あっさり捕まり、所長が川相透の映画作りに協力してる…ってわけだ。

『探偵！。この所長ザクツって殺っていい？』

翔太郎「…後で何か奢るから止めてくれ」

ちなみに気付いてるかどうかは知らないけれど、今俺変身してます。

配役になるはずだった一人が風邪で休んで、休日まったりライフを満喫しようとした俺に電話が掛かってきた訳で…

亜樹子「…で、そこでこー…んちゅー！つと！…ほらほら！」

^{照井}刑事にキスシーンを要求する所長。
誰か止めろよ。

照井「…」

ん？

【プッ…プッ…プッ、プー！】

照井「絶望が俺の、ゴールだ…！」

そう呟いた刑事は猛スピードで逃げ出した。
…ってか速いなオイ！

亜樹子「オッ^{追っかけて睦月}ペケテンムツキー！」

真倉「オデハマツk…俺は真倉だァー！」

奇声をあげながら刑事を追いつけるマッキー。

マッキーも報われないなあー…

『なあ、監督』

透「…！？（ビクッ）」

俺に呼ばれオドオドする監督…ちよつちショック…

『いや、そんなに怯えんでも…まあいいや』

透「…？（ビクビク）」

この人そんなに人が怖いのか？（汗）

『アンタ…ホントはこの制作状況じゃダメだって思ってるだろ？』

透「…！」

やっぱりねえ…

『別に怒りやしねえよ。ただ、自分の考えをスケッチブックじゃなくて口で言ってみな。』

言葉ってのは時代が創り出した魔法…感情を、想いを伝える魔法だ…その言葉が無けりゃ、文化はもちろん…映画だって生まれなかった。

無理に、とは言わねえさ。だけど、役者の『動』^{エンギ}とスタッフの『協』^{ハタラク}、監督の『声』^{シジ}で映画は完成する。

そんだけ覚えといってくれよ?』

透「……」

柄にも無く説教っぽくなっちゃった…探偵のハーフボイルドが感染半熟君したか? うっ

――――

一回変身を解除してトイレへ行ったら監督がメモリを盗んで逃げたらしい。
やれやれだ。

「…なんだあれ」

ディガルコーポレーション…今現在若菜さんが社長を勤めている会社の最上階が淡い翠色に光っている…事件だな。

? 『随分と他人事ね…』

「今度は何用か? 【シュラウド】さん?」

俺の背後に顔を包帯で全体を隠し、黒尽くめの女が現れる。

シュラウド『あの場所に行かないの?』

「俺は実に臆病者でね…(嘘
嫌々な予感がする」

嫌な予感がするのは本当だ。まるで誰かが踏み込んだやいけない領域に踏み込んだしまった様な感覚…
本当に嫌になるくらいに悪寒が背筋を走る。

シュラウド『…ミュージアムがエクストリームの力を手に入れた様
ね』

「^{エクストリーム}『超越』…?」

聞き慣れない単語がシュラウドの口から出る。

そう言えば探偵たちも『エクストリーム』がどののと言ってたな。

シュラウド『鎧尉阿木土…これを』

シュラウドから渡されたのは銀色のアタッシェケース…

中には黄色の『L』、紫色の『G』、白銀色の『I』、青銅色の『S』、金色の『K』、黒金色の『S』…六色の純正ガイアメモリだった。

シュラウド『それは貴方のメモリ。』

井坂に頼まれて、ある人物と協力して作ったメモリよ』

…井坂…ちゃっかりパワーアップ頼みやがって…

「…っし、ちよつくら暴動止めてくつか!」

気付いた頃にはシユラウドの姿は無かった。

まあそれはいつもの事。

問題は…

「正直しつこいぜ?」

俺の目線の先には大勢の黒尽くめの男たちと黒くダサイ革ジャンを羽織った男。

男「悪い事は言わねえよ…ミュージアムに就きな。

そうすりゃ人生楽しいぜえ…? ヒヒッ!」

目は虚ろで大きな隈…ありや完全に吞まれてるな。

「残念だがお断りだ。将^俺が仕える王は将^俺が決める!」

そう言って俺はジェネラルドライバーを腰にマウントする。

それと同時に男たちも懐からガイアメモリを取り出す。

《GENERAL》

《WOLF》

《《MASQUERADE》》

「変身…!」

《GENERAL》

俺はジェネラルへ、相手は狼人間の様なウルフドーパントと毎度お馴染み、戦隊物で言えばヤー○ットとかバラノ○ヤ兵みたいなマスカレイドドーパント。

対峙している間でも『何か』が放つ威圧感がヒシヒシと伝わってくる。

ウルフドーパント
WD 『お前も感じるだろうよ…？この興奮するほどピリピリした威圧感、圧倒的な力をよォォォ！』

ウルフドーパントはシャウトしたと同時に凄まじいスピードで突っ込んでくる。

『確かに…だが、それだけだ！』

《GENERAL AX》

ドライバー中央右側のギア、『ヘルズギア』を内側に二段回戻し、ジェネラルの固有武装の一つの鎖付き片刃戦斧、チェインバトルアックス『ジェネラルアックス』が召喚される。

『動きを…止める！』

《GRAVITATION》

そして重力の記憶を持ったメモリをジェネラルアックスのメモリスロットへ差し込む。

《GRAVITATION! MAXIMUM DRIVE!!》

『グラビトンフィールド!!』

ジェネラルアックスの柄尻で地面を叩くと俺の周囲10mが押しつぶされる様に凹み、マスカレイドドーパントも全員押し潰される。

ウルフドーパントも例外ではなく、潰れはしていないが、地に伏せている。

WD『ぐおお…何だ!? 体が…重い…!!?』

ウルフドーパントは視えない重圧により、未知への恐怖と力の消失に絶望した。
メモリブレイク

『止めだ!』

今度は左側のギア、『ヘヴンズギア』も内側に二段回戻し、ドライバ―両端にある『リミットボルト』を開閉する。

《GENERAL! MAXIMUM DRIVE!!》

その瞬間、ジェネラルアックスの刃がエメラルドグリーンの風を纏って巨大な翠色の刃となる。

そして俺はそれを思いっきり振り上げる。

『ジェネラルインパクト!!』

そして一気に振り下ろし、ウルフドーパントのメモリブレイクは完了した。

『断罪完了…ってな』—N O s i d e

変身を解除した阿木土は遂に強大な力の発信源にたどり着いていた。

阿木土「あれは…クレイドール…！じゃあ若菜さんか！」

力の発信源はミュージアムの幹部、クレイドールドーパントであり、
そしてそれと同時に園崎冴子の妹、ソノザキ ヲカナ園崎若菜であった。

クレイドールドーパント
CD『あら、数日振りね…阿木土』

阿木土「出来れば、今の貴女には会いたくありませんでしたよ」

CD『連れないわね…まあいいわ。今は気分が良いんですもの』

若菜の感情は阿木土から観て『狂気』。

以前、井坂が阿木土に垣間見せた狂気以上の狂気が若菜クレイドールの
瞳の奥で渦巻いていた。

CD『あなたにその力を見せてあげるわ…！』

阿木土「残念だけどキャンセルです！」

《GENERAL》

阿木土はメモリを起動させ、ジェネラルに変身する。

阿木土「変身…！」

《GENERAL》

CD『フッフ…』

クレイドールドーパントは依然として微笑み、阿木土ジェネラルはWCJ
エクストラナル トライアルXとATと並ぶ。

CD『…ウウウウウウアアアアアアアアアアアアアアアアア！！
エエエツクストリイイイイイイイム！！』

クレイドールが雄叫びを上げると破片が剥がれ落ちる様に全身が徐々に割れて行き、そしてトンデモない質量を誇る【クレイドールエクストリーム】へと変貌した。

フィリップ（WCJX）《何だこれは…今までの若菜さんじゃない…
姿形も、何もかも段違いだ！》

ただでさえ普通のクレイドールにWのこの状態でも苦戦を強いられていた。

プリズムソードで斬ろうにも、特殊能力ではなく基本もとからの頑丈さである為…ダメージは皆無に等しかった。

だが、今度は禍々しいまでに変貌したクレイドールにWは絶望を禁じ得なかった。

『…刑事、探偵。提案がある…その為には三人の力が必要だ』

妙案を思い付いたジェネラルは他二人の仮面ライダーに協力を乞う。

照井（AT）『…行けるのか？』

『精々、退けるのがやつと…つてとこ』

太刀打ち出来ない相手に対し、ジェネラルの策はどう効果を発揮するのかは不明である。

それが気になったアクセルTはジェネラルに問う。

その間にジェネラルは曖昧だが退く事は可能と言った。

翔太郎（WCJX）『今はそれで充分だ。行くぞ照井』

照井（AT）『ああ』

WCJXとアクセルTはジェネラルの提案を受け入れ、クレイドルエクストリームへ向かう。

「BGM…トライアル」

クレイドルエクストリーム
CX 『フン…無駄よ。ハッ！』

通常時とは威力も大きさも格段に変化した火球がWCJXとアクセルTに襲い掛かる。

照井（AT）『ふっ！はあっ！』

翔太郎（WCJX）『くっ！おりゃあ！』

それをWCJXはプリズムソードで斬りながら、アクセルTは高速で動いて回避する。

CX『無駄よ無駄。貴方達は私に何をしようと勝てないのよ!』

火球を放ちながら嘲笑うクレイドールX。

しかし…

照井（AT）『それはどうかな?』

照井がクレイドールXの言葉を嘲笑うかの様に言い放つ。

CX『何ですって…?』

…っ!しまった!』

クレイドールXは気付く。三人の仮面ライダーの中で一番若く、変身した姿は一番大柄の彼の姿が無い事に…

しかし、時既に遅く…

《GENERAL! MAXIMUM DRIVE!!》

断罪の拳はクレイドールXの背後を捉えていた。

『ジェネラル：ブウウレイツカアアアアア！！！！！』

ドガガガガガガガッ！！！！

削り取る様な大きな音が辺りに響く。

大きな音が鳴り止み、土煙が晴れる。

そこには、クレイドールXのガイアドライバーの位置から少し上の方に拳を突き立てるジェネラルの姿があった。

CX『：フフツ、残念。』

私のドライバーを壊して倒すつもりだったのだろうけど、失敗ね…
阿木土』

虚^{こけおど}仮威しと言わんばかりに再び嘲笑うクレイドールX。
だが…

『：いや、これでいい』

ジェネラル：阿木土は仮面の下でニヤリと笑う。

CX『：何ですって？』

『あなたを一時的に戦闘不能にさせましたから』

CX 『ハッ！何をバカな…っ！？』

ジェネラルの発言を鼻で笑うクレイドールXだが、体に残る違和感に漸く^{ようやく}気付く。

『これですよ』

そう言ってジェネラルが見せたのは黒金色の『S』のメモリ。

《SPELL!》

スペル…魔術のメモリである。

『このメモリは地球上存在した【であろう】魔術関係のメモリ。炎や風を操るのは勿論、探偵のプリズムソードと同じ…能力無力化や弱体化の魔術も可能』

CX 『そんな…園崎のゴールドメモリと同等以上のメモリ！？そんなメモリあるはずが…』

ゴールドメモリ、それはクレイドールやナスカなどの園崎のみが使える上級ガイアメモリである。

スペルのメモリはそれさえも凌駕する能力を持っている。

『先程、思い出したんですよ』

CX 『え…？』

『ジェネラルのメモリに隠された能力を…』

遠くで聴いていたWCJXとアクセルTは仮面の下で驚愕の表情を見せていた。

フィリップ（WCJX）《ジェネラル：検索を完了した。見た目はドーパントが使う様な外見のガイアメモリだが、それはフェイクさ》

翔太郎（WCJX）『フェイク？何でそんな回りくどい事を…』

フィリップ（WCJX）《それは園崎を欺く為さ。ジェネラルのメモリにもスペルのメモリと同様に反則級の能力を持っているからね。尋常じゃない頑丈さや異常なまでの力強さ。しかし、ジェネラルの真骨頂はそこじゃない》

照井（AT）『どう言うことだ』

フィリップ（WCJX）《そう焦らないでくれ。

ジェネラルは幾万もの兵を束ねる将の為、戦術は必要不可欠となっている。

戦術は知識。ジェネラルのメモリには僕と同じ位の知識が詰まっているんだ》

翔太郎（WCJX）『…って事は何か？メモリ一つに【地球の本棚】と同じ情報量があるって事かよ！』

地球の本棚…それは地球自身の記憶が詰まった無限のデータベースである。

Wの今の状態、サイクロンジョーカー・エクストリームは、常時的にそのデータベースと直結しているのである。

翔太郎の相棒、フィリップが言うには、ジェネラルはWCJXと同等以上の能力を持っていると言う。

翔太郎（WCJX『冗談だろ…』

照井（AT『まさに規格外だな…』

あまりの規格外さに翔太郎と照井は呆れかえる。

フィリップ（WCJX『ちなみに、今現在スペルのメモリが発している能力は【攻性能力無力化】。要は戦う行為を無力化したらしい』

翔&照（身も蓋も無い…（汗）

出来ればジェネラルと戦いたくない。（色んな意味で）
そう思った翔太郎と照井であった。

CX『くっ…この規格外が…！』

『歴戦の記憶を軽視するからですよ。
しかし、あくまでも貴女を退くのが俺の目的。早々にお帰り下さいな…』

土煙が晴れてから殆んど動かないジェネラルとクレイドールX。
しかし、クレイドールXの背面に拳を突き立てているジェネラルの方が優位に立っていた。

CX『…チッ。今度会ったら覚悟することね』

『その言葉、そっくりそのままピッチャー返しますよ』

クレイドールXは舌打ちしてワームホールを開く。

ジェネラルはクレイドールXの言葉を気にもしない風に返す。

そしてクレイドールXはワームホールで去り、ジェネラルは変身を解く。

そこへ翔太郎たち四人が寄ってきた。

翔太郎「スゲェじゃねえか阿木土！俺たちでも苦戦したクレイドールを退くなんて…」

「…ごめん。一人にしてくれ」

翔太郎が賞讃の言葉を贈ろうとするが、阿木土は暗い表情で帰路へ着いた。

翔太郎「…？何だよ一体…」

亜樹子「何だか悲しそうだったね…」

翔太郎は阿木土の対応に疑問を持ち、亜樹子は阿木土の暗い表情が付き心配していた。

「その理由は私が話すわ」

そう言って翔太郎たち四人に近付いて来たのは：

フィリップ「冴子：姉さん？」

冴子「数日振りね、来^{らいと}人」

園崎家長女、園崎冴子その人だった。

—???

風都のとある路地裏。

そこにクレイドールXの開いたワームホールの様な歪^{ひずみ}みが現れる。

ドサッ！

？「あいったたた：イマイチ着地は慣れんのう。

：おお！風車じゃ！風都タワーじゃ！

つまりは無事に着いたという訳じゃな？風都：【仮面ライダーWの世界】に！」

漆黒に銀のラインが入ったファスナー付きの特注チャイナ服に赤いジャケット、手には水色の錫杖の様な物：容姿は幼気ながらも整っており、目はルビーの様に赤く、毛先だけ黒くなった金髪ポニーテールというある意味奇抜な格好の少女が現れる。

？「へんちくりんな変身ベルト貰って、更にガイアメモリとは…
【森羅^{しんら}】も話がわかるのう♪」

少女は立ち上がって付いた土を叩いてニヤニヤしながら右手の錫杖をクルクルと回し、左手に持つ黒いアタッシュケースを見る。

？「色々風都を観光したいのじゃが…人探しが先じゃの。
待っておれよー！風都ラーメン！…じゃなかった、【鎧尉阿木土】
！」

声高らかに気合を入れる少女。
街中でやれば可哀想な眼で見られるのは間違いないだろう。

？「そんじや小牟^{シャオムウ}、いつきまーす！…ってか？」

少女小牟の冒険は始まった！…のか？

AL: THE
NEXT
TO
KAMEN
RIDER
GENER

第五話 【日常のA／休日計画は確実に】（後書き）

出しちゃいました。

阿木土「良いのかよオイ：それに小牟のあの服装ってムゲフロヴェの服だろ？」

Yes

阿木土「そういえば候補がもう一人居たそうじゃないか」

Yes。

【ルミナスアーク2ーウィルー】から『氷影の魔女』ことファティマさんを出すつもりでした。

阿木土「クジ引きで決めたらしいな」

素直クールなファティマさんか、元気とネタの塊である小牟：どちらかとは少々悩みました。

阿木土「ファティマさんや小牟は平行世界版らしいな」

Yes。

ファティマさんは原作と似通った生活にて、特殊な魔法を使う時に「くしゃみ」というドジを踏んだ素直クールドジっこでした。

小牟は零児との関係性を持たず：要は有栖零児がないifの話しからの参加となっております。

阿木土「それ以外は変わらないんだな？」

本編で言っていたガイアメモリとドライバー以外は一緒です。

阿木土「そうか。」

さて次回は？」

OK！

突如、鳴海探偵事務所に現れた奇抜？な少女『小牟』。

彼女はとある用事で阿木土を探していると翔太郎たちに依頼。

園崎冴子から聞いた阿木土と園崎の関係を思い出しながらも捜査を進める翔太郎。

一方、園崎冴子から聞いた情報を基に風都霊園へと足を運ぶ照井。
そこには別れた時と同じ暗い表情で墓の前に立つ阿木土の姿があった。

次回、仮面ライダージェネラル！

第五話

【悲しみのG／同等の悲劇】

悲しみの闇を断罪せよ、ジェネラル！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6372l/>

仮面ライダージェネラル

2010年10月15日21時46分発行